

<原著>

オープンガーデンに見られる趣味縁の可能性に関する考察
—レジャー活動を通じた豊かさの指標づくりに向けて—

土屋 薫¹ 林 香織² 下嶋 聖³ 宮崎雅代⁴

The potential of Open Garden as a source for cultivating enthusiast groups

Kaoru Tsuchiya¹, Kaori Hayashi², Hijiri Shimojima³ and Masayo Miyazaki⁴

Abstract

The extra short version (8 items) of the Leisure Boredom Scale indicates a significant difference between ordinary people and the members of the gardening club in Nagareyama city in Chiba prefecture.

As the result of a survey for the members of the gardening club in Nagareyama city, people could be divided into two groups. One group requires a source of motivation in order to engage in leisure activity. The other group feels that they lack the skills needed for leisure activities.

Using the extra short version (8 items) of the Leisure Boredom Scale as an indicator for wellness, we can discover the road map toward happiness.

In the case of Nagareyama however, a gardening enthusiast association overlaps with the local community, because of its town policy, “Nagareyama Green Chain Strategy”. So we have to look at other cities for populations that are more representative of the society at large.

1. はじめに：豊かさをとらえる鍵は何か？

総理府から内閣府に引き継がれて実施されている「国民生活に関する世論調査」において、1980（昭和55）年以來ずっと、『物の豊かさ』よりも『心の豊かさ』に重きをおいて生活をしていきたい」と答える人が上回っている¹⁾。

このことは、「目に見える製品を購入したりサービスに対価を払ったりすることによって問題状況は解決し得る」という産業革命以來の世界観が変わりつつあることを意味する²⁾。そしてこのことはまた、国民総生産（Gross National Product, GNP）や国内総生産（Gross Domestic Product, GDP）といった社会指標が見直される段階に入ったことを意味する³⁾。

どちらの指標とも、産業政策に呼応するかたちで数値の積み上げによって組み立てられているが、これらの指標でとらえられるのは総量であり、ひとりあたりの「量」については平均でしかわからない。つまり、どんなに精緻に積み上げたとしても、ひとりひとりの豊かさの目標値としては必ずしも有効に機能しない。このことは、「新国民生活指標」（1992（平成4）年）の活用状況からもわかるだろう⁴⁾。また、太平洋戦争下における日本の厚生運動の状況を見ても、「量」によらない目標設定の難しさは否定できない⁵⁾。

それでは、豊かさを指標化して目標設定することは砂上の楼閣に過ぎないのだろうか。

1972（昭和47）年にブータン国王が提唱した指

1 江戸川大学社会学部 College of Sociology, Edogawa University

2 江戸川大学メディアコミュニケーション学部 College of Media Communications, Edogawa University

3 東京農業大学短期大学部 Junior College of Tokyo University of Agriculture

4 特定非営利活動法人日本トピアリー協会 Nonprofit Organization Japan Topiary Association

標は「国民総幸福量 (Gross National Happiness, GNH)」と呼ばれているが⁶⁾、それ以前の国際的な指標との決定的な違いは、一人あたり数時間かけて行う対面式の聞き取り調査を数量化した点であろう⁷⁾。この指標が注目に値するのは、既存の社会統計指標だけでなく、そこに個人の状況や主観的な認識を組み込んでいる点である。そのことによって、「目に見える」目標・ビジョンとして、豊かさの「かたち」を提示することが可能になったのではないだろうか。ただ実際には、人口73万人ほどのブータンの手法を一般化するのには現実的ではない⁸⁾。

価値観が多様化した現代社会においては、「豊かさ」は「人それぞれのもの」としてはじめて実現され得る。ただしこれは、各々が好きなことをやればそれでいい、ということでは済まされない。たとえ個人の活動であっても、必ず社会資本の影響を受けるからである。人的ネットワークや環境等、与えられた社会資本を再配分するかたちでしか人は生きていけない。その意味で、個々人の嗜好が集約されるレジャー活動は、個人と社会を結ぶ豊かさの結節点として見逃せない。ブータンの手法からは、豊かさをとらえる上で、レジャー活動に関する統計データと個人の余暇診断結果を結びつけて総合的に分析することの可能性が見えてくる。

そこで本研究では、このような問題意識に基づき、ガーデニングという個人のレジャー活動を、来訪者という要素から社会につなぐ働きを持つオープンガーデンに注目して、豊かさを実現する指標をつくる上で求められる項目について探ることを目的とする。

なお、関連概念として「horticulture」があるが、ここでは、これに対応する訳語としての果樹や野菜生産を含めた農業分野としての広義の「園芸」ではなく、また盆栽のように鑑賞を目的とした特定の手法による栽培を指す狭義の活動でもなく、レジャー白書において趣味・創作部門に分類されている「園芸・庭いじり」という文脈で、楽しみのために行われている緑化活動一般を指してガーデニングとして取り扱う。したがって、日本において1990年代(ほぼ平成に入ってから)以降流行し始めたイングリッシュ・ガーデンやハーブづ

くりだけでなく、また園地の所有者による整備行動のみならず、路地やマンションのベランダで鉢植えを楽しむ活動等も含めてガーデニングとして位置づける。ただし、ここでは市民農園や園芸療法としての活動は含まないものとする。

またオープンガーデンに関して、その発祥の地であるイギリスでは、チャリティーを目的とし、特定の団体による統一的審査を経て実施されている⁹⁾。近年日本で実施されているオープンガーデンはその限りではない。ただ日本のオープンガーデンは、地域によって運営の手法は異なるものの、「自宅の庭を無料で公開する」という一点で共通している。ここでは、組織的に自宅の庭を無料で公開する活動を指してオープンガーデンとして位置づける。

2. 日本におけるガーデニングとオープンガーデン

(1) 先行研究の状況

1990(平成2)年に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」(大阪花博)以降、日常生活の中に緑や花を持ち込むことに関心が高まってきたと言われている。1997(平成9)年には、「ガーデニング」という言葉は流行語10選の中に選ばれるが、高橋・下村によれば、雑誌や出版の動向から見ると、90年代中頃からガーデニングが一種のブームとなったことがわかる、と言う¹⁰⁾。また長谷川によれば、新聞の記事(見出し・本文)や雑誌記事名や書籍名における「ガーデニング」という語の登場件数からみると、1997(平成9)年以降に急激な増加が見られると言う¹¹⁾。

日本におけるオープンガーデンに関する研究は、先駆的事例としての個人庭園の開放への着目から始まり、「私的な空間である庭園の公共性」という分析軸が共有されるかたちで、主に造園学や都市計画の分野で展開されてきた。

たとえば、北海道恵庭市恵み野地区を事例とした研究においては、「街並み景観への寄与」や「コミュニティ形成の媒体としての働き」が注目されている¹²⁾。また相田と進士は、庭を通じた住民(庭園主)と来訪者との交流によって、個人庭園の公共的展開可能性を指摘している¹³⁾。つまり、その関心はあくまで庭の位置づけに向いていたと言う

ことができるだろう。

行政の役割に注目している点で、野中による長野県小布施町のオープンガーデン研究もこの系譜に位置づけることができる¹⁴⁾。また、たとえ直接的には地域経済への波及効果といったテーマであっても、オープンガーデンの担い手としての市民団体や行政の役割が問題意識の中心にある研究は、この流れの中に整理できるだろう¹⁵⁾。また、オープンガーデン実施者の意識構造の研究に関しても「まちづくりの意識の重要性」が重要な柱として挙げられているし¹⁶⁾、「行政や学校等の支援組織」による影響が主題として取り上げられている¹⁷⁾。

ただし、これらの先行研究では、イベントとの関連や来訪者の動線や庭園の空間的把握に関する研究も含め¹⁸⁾、たとえば、オープンガーデン実施エリア内における複数の訪問庭の移動実態をとらえるような記述的研究が中心であり、経年的変化を追うパネル調査は限られている¹⁹⁾。

(2) 現代日本におけるガーデニングの位置づけ

ここで、レジャー白書のデータをもとに、実際に日本におけるレジャー活動としてのガーデニングの状況を確認してみたい。

2012（平成24）年におけるレジャー活動の参加人口ベスト10は、1位＝国内旅行、2位＝ドライ

ブ、3位＝外食、4位＝映画、5位＝音楽鑑賞、6位＝カラオケ、7位＝動物園、8位＝宝くじ、9位＝ビデオ鑑賞、10位＝園芸となっているが、これらのレジャー活動の過去20年間の参加人口の平均順位を計算すると、国内旅行＝2.1位、ドライブ＝2.6位、外食＝1.4位、映画＝10.4位、音楽鑑賞＝7.3位、カラオケ＝4.8位、動物園＝7.7位、宝くじ＝8.1位、ビデオ鑑賞＝5.8位、園芸＝11.0位となっている。

ここで、ガーデニングと比較しやすいものを取り上げて作成したものが図1である。

こうしてみると、上位のレジャー活動に大きな変動はなく、国内旅行・ドライブ・外食の3つが占めていることがわかる。

それ以外のレジャー活動の状況を見てみると、たとえば映画では、ヒット作品や環境の変化の影響が見られる²⁰⁾。また宝くじにおいても同様に、参加人口が変動しているときには環境の変化が関わっている²¹⁾。

これらのレジャー活動と比べると、ガーデニング（園芸・庭いじり）に関しては、特に産業の側からアクションを起こした環境変化は見られない。これまでのレジャー白書においてもあまり注目されておらず、ガーデニングに関する記述があるのは1997（平成9）年と1998（平成10）年のレジャー白書の2件のみである²²⁾。

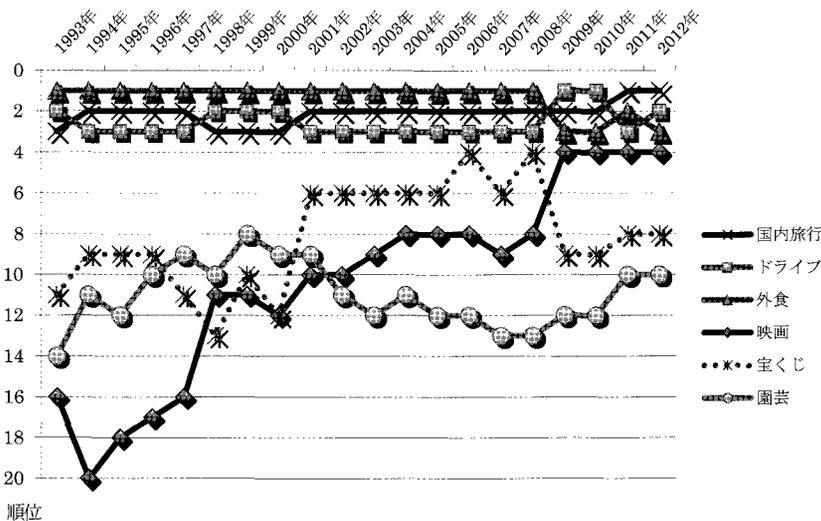


図1 過去20年における主なレジャー活動参加人口の順位
 出典：レジャー白書'95～レジャー白書2013のデータから作成

ここから言えることは、ガーデニングに関わる「ブーム」は、マスメディアや作品、制度の導入による産業側のしかけで一時的に盛り上がったものではない、ということである。

また、2012（平成24）年における参加人口ベスト10のレジャー活動について、性別・年代別の構成比をレジャー白書のデータから拾ってみた（図2・図3）。これを見ると、「園芸・庭いじり」は男女とも60歳代以上が過半数を占めているこ

とがわかる。

そこで次には、「園芸・庭いじり」と比較するために、同じくレジャー白書から、参加人口の多寡を問わず、60歳代以上が過半数を占めるレジャー活動を拾い上げ、男女別にその構成比を整理した（図4・図5）。これによれば、「パークゴルフ」や「クルージング」、「ピクニック」といったレジャー活動は、70代では明らかに男性の参加率の方が高く、逆に「登山」では70代で女性

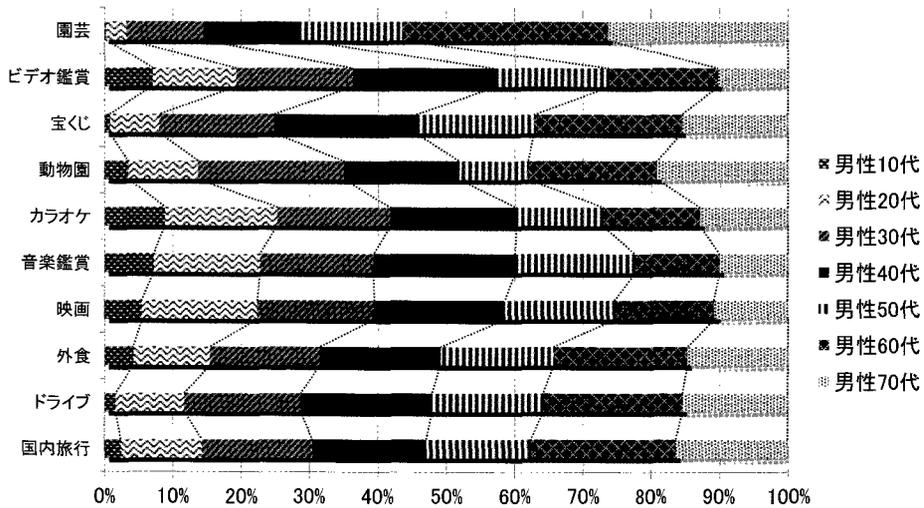


図2 参加人口の年代別構成比（男性）
出典：レジャー白書2013のデータから作図

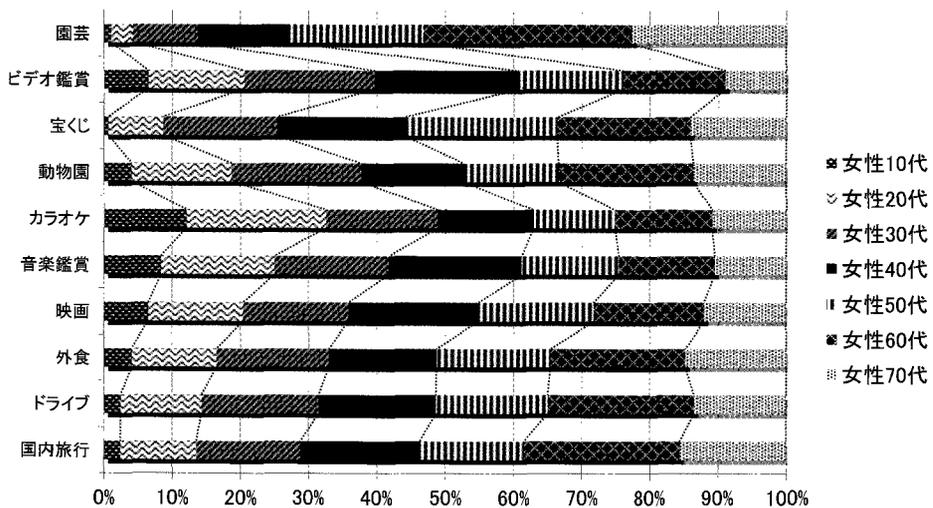


図3 参加人口の年代別構成比（女性）
出典：レジャー白書2013のデータから作図

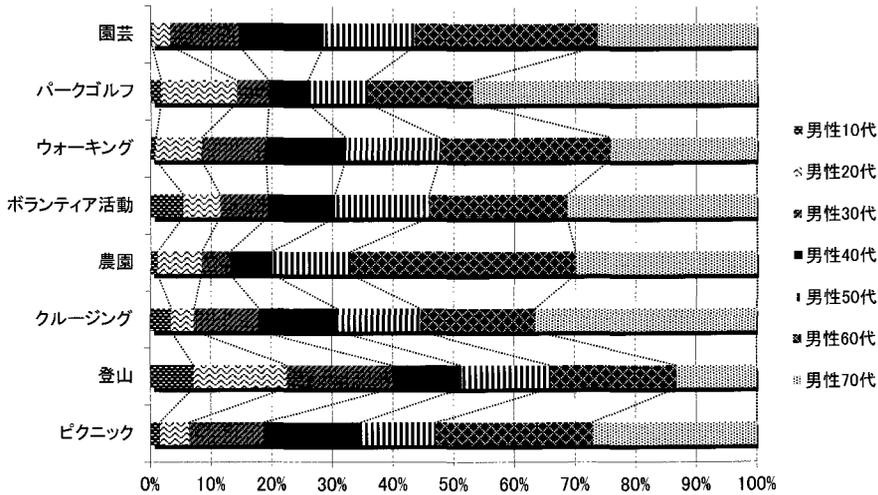


図4 60歳代以上が過半数を占めるレジャー活動 (男性)
出典：レジャー白書 2013 のデータから作図

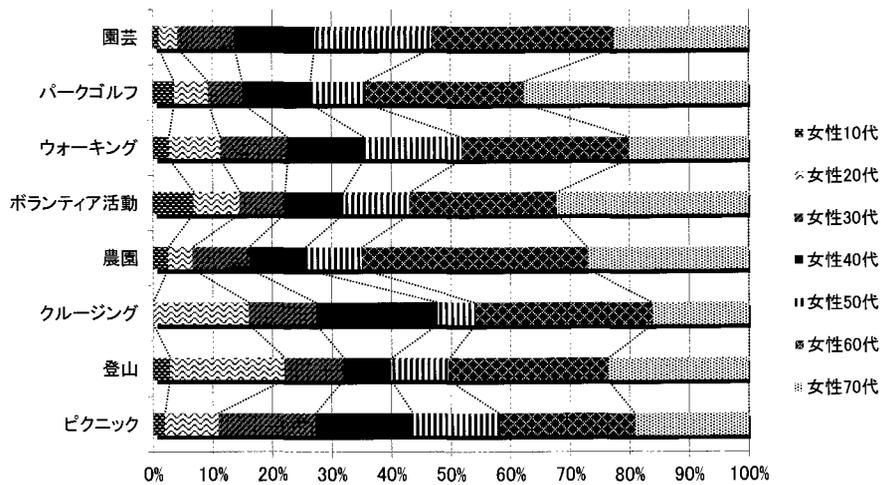


図5 60歳代以上が過半数を占めるレジャー活動 (女性)
出典：レジャー白書 2013 のデータから作図

の参加率の方が高くなっている。これらのレジャー活動に比べると、「園芸・庭いじり」では、60代・70代で男女差は目立たない。

そこでさらに、これらのレジャー活動の特性について検討する上で、年間平均活動回数 (回)・1回あたり費用 (円)・年間平均費用 (千円)・参加人口 (百万人) の4点から整理したのが図6である (年間平均活動回数が2回で、1回あたりの費用が39,750円と桁の異なるクルージングは外した)。

こうして見てみると、年間平均活動回数が10

回未満で1回あたりの費用が5,000円以上にも及ぶ登山は、年間活動回数が少なく1回あたりの費用が桁違いに高いという点で、ほかとは全く趣の異なるレジャー活動であることがわかる。またピクニックに関しては、1回あたりの費用は登山ほど高くないが、年間平均活動回数が少ないという点で、ほかのレジャー活動とは異なる傾向にあることがわかる。また、園芸とウォーキングは傾向が似ているが、年間平均活動回数と参加人口の点で検討する優先度の高いレジャー活動であることがわかる。ただし、オープンガーデンという活動

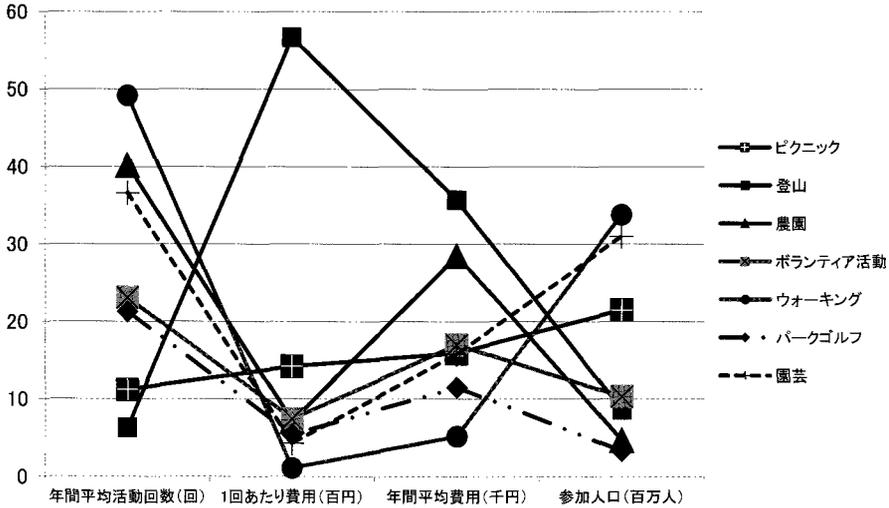


図6 市場動向から見た高齢者の参加するレジャー活動
出典：レジャー白書 2013 のデータから作図

を視野に入れたとき、社会との結節点という点で、ガーデニングと比べてウォーキングは乏しいと言わざるを得ない。

そこで、本研究では、特にオープンガーデンの担い手に着目する形で、事例研究を進める。なお対象地としては、筆者がこれまで研究フィールドとしてかかわってきて、地域特性や住民意識について知見の蓄積が進んでいる千葉県流山市を取り上げるものとする。

また、趣味縁の観点から個人の状況をとらえる方法として、余暇診断ツールのうち、Iso-Ahola と Weissinger の開発した 16 項目の余暇退屈度

ショートバージョンについて、先行研究において信頼性と妥当性が確認されていることから²³⁾、さらに 8 項目にトリミングした短縮版を用いるものとする(表 1)。

3. 事例研究：千葉県流山市のオープンガーデンに見られる趣味縁

(1) 千葉県流山市の特性

流山市は、千葉県の東葛エリアに位置し、東は柏市、南は松戸市、西は江戸川、北は野田市と接している。2005(平成 17)年 8 月につくばエクスプレスが開業すると、都心まで 30 分とかからな

表 1 余暇退屈度ショートバージョン(8 項目)

項目番号	簡略表現	項目内容
LBS_1	面倒	私にとって、自由時間は面倒で厄介なものである
LBS_3	退屈	自由時間があると、退屈してしまう
LBS_5	無駄	自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする
LBS_6	それなり	自由時間の際、いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといって、ほかにどうしたらいいかわからない
LBS_10	ぼんやり	自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいのかわからない
LBS_11	寝る	自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう
LBS_14	不愉快	余暇活動をそれほど楽しいとは思わない
LBS_15	技術不足	私は、余暇活動を楽しむ術(すべ)をあまり身につけていない

いことから、都心へ通勤するいわゆる「新住民」が急激に増加し、そうした新住民の存在を背景として、「流山グリーンチェーン戦略」という施策を打ち出してきた。これは、各庭に接道緑化と風の通り道の確保を担ってもらうことで、市街地全体のヒートアイランド対策を実現しようとするものである。またこれは、庭の手入れを通じた地域コミュニティ促進のねらいもあった。

趣味縁という観点から考察する上で、先行研究における余暇診断調査の結果に注目すると、流山市民全体をサンプルとした余暇退屈度調査から²⁴⁾、流山市民は余暇を「退屈ものとしてはとらえていない」が、休日の活動が消費活動中心に展開されているので、「楽しむ術」や「情報」を提供するだけで、レジャー活動の状況が大きく改善する余地がある、と言う。

この調査で注目されるのは、「余暇活動を楽し

む術をあまり身につけていない」(LBS_15)という回答が1位(13.5%)だったことである(図7)。また、5件法による得点化では(全くそう思わない=1点、あまりそうは思わない=2点、どちらとも言えない=3点、ややそのとおりである=4点、全くそのとおりである=5点)、この項目の平均点が2.15点と、8項目の中で最も高くなっている(表2)²⁵⁾。つまり流山市全体では、動機づけよりも技術への欲求が高いことがわかる(回答数の2位は「自由時間の際、いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといって、他にどうしたらいいかわからない」〈LBS_6〉=9.7%、3位は「自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいのかわからない」〈LBS_10〉=8.6%となっている)。

この調査においては、レジャーに関して否定的な記述がされている8項目全部に、「全くそのと

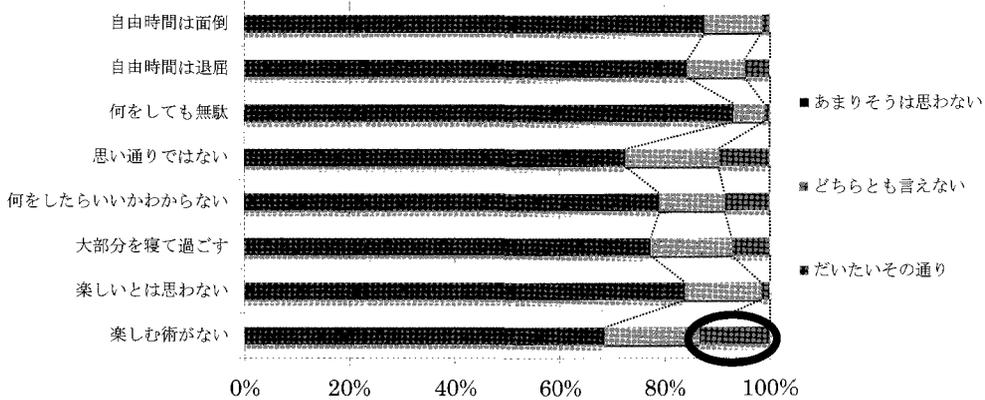


図7 流山市における余暇退屈度の回答分布
 出典：平成20年度江戸川大学学内共同研究報告書
 『学際的アプローチによる地域研究』p.45に加筆修正

表2 余暇退屈度の基本統計量(流山市全体)

	LBS_1	LBS_3	LBS_5	LBS_6	LBS_10	LBS_11	LBS_14	LBS_15
	面倒	退屈	無駄	それなり	ぼんやり	寝る	不愉快	技術不足
平均値	1.62	1.71	1.51	2.03	1.85	1.86	1.71	2.15
最頻値	1	1	1	2	1	1	1	2
標準偏差	.757	.855	.658	.990	.972	.994	.783	1.035
最小値	1	1	1	1	1	1	1	1
最大値	5	5	4	5	5	5	5	5

N = 452

おりである」と回答する（レジャーに対する否定的な態度を意味する）と、トータルスコアは40点となる（8項目×5点満点）。また、8項目全てに「全くそう思わない」と回答する（レジャーに対する肯定的な態度を意味する）と8点になる計算である（8項目×1点）。実際に8項目を集計した平均点は14.44であったが、このことから、流山市民はレジャーに対して比較的肯定的な態度を示していると判断できる。

さらに因子分析の結果を見ると、スケール全体の信頼性係数はクロンバックのアルファで0.86となっており、独立した尺度としての一貫性を保持しているものと考えられるが、共通性に着目してみると、「自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう」（LBS_11）と「余暇活動をそれほど楽しいとは思わない」（LBS_14）という項目における値が低くなっている（表3:LBS_11 = 0.195、LBS_14 = 0.371）。そして「自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする」（LBS_5）のみ最大値が「ややそのとおりである = 4点」とほかの項目より低くなっていること、それから平均点が1.51と最も低くなっていることと合わせると（表2）、レジャー活動への動機づけが比較的高いことを伺わせる。

また、抽出された2因子では75.04%の説明力があるが、因子の内容に関しては、回転後の行列と因子成分のプロットから考えてみたい（表4・

図8）²⁶⁾。

これによれば、余暇退屈度の8つの項目は2つの因子から位置づけることができる。それぞれの因子に対する因子負荷量から、第1因子は、「私にとって、自由時間は面倒で厄介なものである」（LBS_1）・「自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする」（LBS_5）・「自由時間があると、退屈してしまう」（LBS_3）という3つの項目に代表されるグループで、「自由時間に対する否定的な認識」と名付けることができる。また第2因子は、「自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいかわからない」（LBS_10）・「自由時間の際、いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといって、ほかにどうしたらいいかわからない」（LBS_6）という2つの項目に代表されるグループで、「自由時間におけるアノミー（無気力）状態」と名付けることができる。

因子負荷量のみに着目すると、「余暇活動をそれほど楽しいとは思わない」（LBS_14）という項目は第1因子に位置づけることができる。また、「自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう」（LBS_11）と「私は、余暇活動を楽しむ術（すべ）をあまり身につけていない」（LBS_15）という2つの項目は第2因子に位置づけることができる。

ただ実際にプロットしてみると、「自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう」（LBS_11）という項目は、どちらの因子得点も高くないこと

表3 余暇退屈度項目に見られる共通性（流山市全体）

		初期の 因子負荷量の 2乗和	因子抽出後の 因子負荷量の 2乗和
LBS_1	面倒	.483	.626
LBS_3	退屈	.541	.637
LBS_5	無駄	.464	.563
LBS_6	それなり	.644	.720
LBS_10	ぼんやり	.662	.824
LBS_11	寝る	.177	.195
LBS_14	不愉快	.392	.371
LBS_15	技術不足	.484	.481

因子抽出法：最尤法

表4 流山市全体における余暇退屈度の因子特性

寄与の程度	第1因子		第2因子	
	自由時間に対する否定的な認識		自由時間におけるアノミー（無気力）状態	
		因子負荷量		因子負荷量
項目	LBS_1【面倒】	0.90	LBS_10【ぼんやり】	0.88
	LBS_5【無駄】	0.80	LBS_6【それなり】	0.71
	LBS_3【退屈】	0.76	LBS_11【寝る】	0.56
	LBS_14【不愉快】	0.47	LBS_15【技術不足】	0.55
固有値（%）	52.40		14.28	
累積寄与率（%）	38.30		75.04	

因子抽出法：最尤法

回転法：プロマックス法

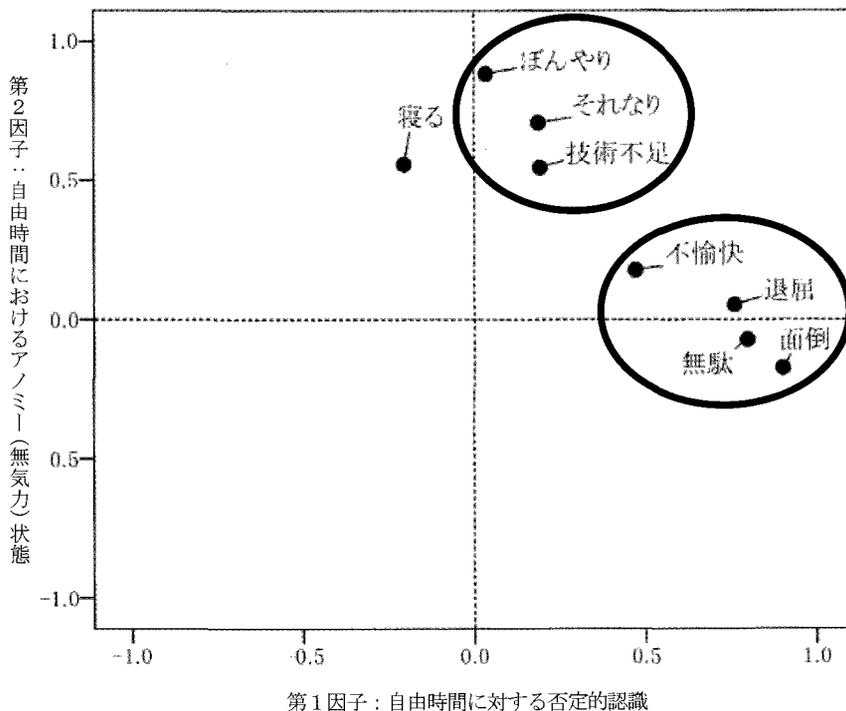


図8 余暇退屈度の成分プロット（流山市全体）

から、2つのグループとは独立したものとして意識しておくべきことがわかる（図8）。

また、第2因子「自由時間におけるアノミー（無気力）状態」に位置づけられるグループの中に、「私は、余暇活動を楽しむ術（すべ）をあまり身につけていない」（LBS_15）という項目が位置づ

けられることは、「どうしたらいいのかわからない」という動機づけが十分ではないという項目群と「余暇活動を楽しむ技術が足りない」という2つの位相が未分化の状態にあると言える。逆に言えば、技術を身につければアノミー（無気力）状態から脱することができる可能性を示している。

また流山市の一般サンプルにおいては、「休息が十分に取れている場合には、動機づけが得られずまた技術を持たないと、自由時間に対して否定的な態度を持つにいたる」と階層化されていることがあらわれている。

(2) ながれやまオープンガーデンの状況

千葉県流山市のオープンガーデンは、2005（平成17）年11月に千葉県内で初の組織的なオープンガーデンとして開かれて現在に至るが、その運営母体はガーデニングクラブである。そこで、ここではまず、このガーデニングクラブの沿革について概観しておきたい。

流山市のオープンガーデンを運営している「ながれやまガーデニングクラブ『花恋人（カレント）』」は、2005（平成17）年5月に設立された。これは2004（平成16）年11月に流山市で開催されたガーデニングコンテスト表彰式後の交流会において、オープンガーデン開催や同好会等の設立に向けた意見交換がなされたことを直接のきっかけとしている。このガーデニングコンテストというのは、現流山市長の井崎義治氏が2003（平成15）年4月に流山市長として初当選した同年11月に、都市緑化推進運動の一環として始められたものである。第2回が2004（平成16）年6月に行

われた後、第3回からはほぼ現在と同じ部門構成で²⁷⁾、2005（平成17）年からは年1回の募集となっている。こうした経緯もあり、当初、ガーデニングクラブの事務局は流山市の都市整備部公園緑地課に置かれていた²⁸⁾。

2005（平成17）年11月1日付の『広報ながれやま』(No.1, 101)の紹介記事によれば、「会員同士が情報交換をしながら、お互いに刺激を受け、個人の庭をより美しくすることで、地域の美観に貢献したい」として、「花樹あるライフながれやま」というコンセプトを掲げている。これは、当時の「花恋人(カレント)」の会員募集のフライヤーによれば、「形式ばらなくてもいい、ふだん着の生活」で「花と樹のある生活」のことを指すという。いきなり本格的に始めなくても「植木鉢ひとつからでもガーデニングは始められる。そして、その一歩があなたの『ふだん』を大きく変えてくれる」というのである。そして、設立時には18名だった会員も1年後には70名あまりに増えた。

そこで、ながれやまガーデニングクラブ設立以来のオープンガーデン参加庭数について、レジャー白書の「園芸・庭いじり」の全国参加人口と合わせて示したのが図9である。

これを見ると、流山市におけるオープンガーデンの参加庭数と全国的な園芸参加人口とは、必ず

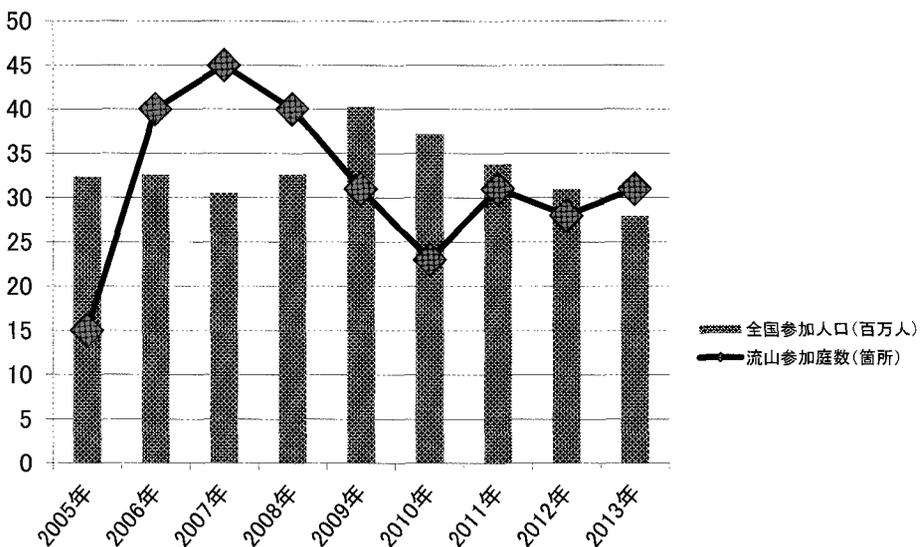


図9 ながれやまオープンガーデン参加庭数と「園芸・庭いじり」参加人口（全国）

出典：流山参加庭数は調査結果、全国参加人口はレジャー白書より

しも連動していないことがわかる。つまり、そこには流山独自の事情があると考えられる。そこで、流山市でオープンガーデンを運営しているガーデニングクラブ自体の状況を見てみると、この間の大きな変化はクラブ執行部の変化である。設立から3年間は初代会長、ついで2年間で2代目会長、そして2010(平成22)年から現在に至るまで3代目の会長となっている。

初代会長の方針は前述のとおり、地域貢献とライフスタイル変革のきっかけづくりとしてのガーデニングである。当時のフライヤーからキャッチコピーを拾えば、「地域デビュー」ということになる。

2010(平成22)年からの大きな変化はもうひとつあり、執行部を中心としたガーデニングクラブ4名が独自の「ガーデニング・ユニット」として活動を始めたことである。具体的には、これまで、2009(平成21)年の雑誌取材をきっかけとして²⁹⁾、クラブ会員のお手伝い、近隣ショッピングセンターの装飾やワークショップといった活動を行ってきている。執行部によるこうした活動は、当然、ガーデニングクラブの活動にも影響を及ぼした。最も大きなところでは、地域貢献という「地縁」から「趣味縁」への変成を促したと考えられる。このユニットのメンバーはインターネットによる情報発信も行っているが、3,000ビュー程度だったアクセス数が、雑誌掲載直後から10,000ビューを超えるようになった、と言う。また、このユニットは、2011(平成23)年から4人のユニットメンバーだけによるオープンガーデンも実施している。

ただ、2009(平成21)年以降、ガーデニングクラブの活動自体に大きな変化は無く、10月からの新年度で総会が開かれ、月に一度の役員会のほか3ヶ月に1回の定例会等、イベントスケジュールに大きな変化は無いと言う³⁰⁾。

実際に筆者による2009(平成21)年の調査では、質問紙調査の自由記述のテキストマイニングが実施されている³¹⁾。関連したキーワードのうち、最も多く使われている「庭」という語に関連するキーワード上位50を用いて、それぞれの語の関連性について、同時に出現する頻度をマッピングした結果、庭に対する感情的な評価(「感激」「嬉しい」

「うつくしい」「楽しい」「幸せ」)で構成されている。さらに、「参考になる」と考えている割合が高くなっているが、このことから、オープンガーデンの来訪者にとっては、庭そのものを見ることも大事だが、庭の「つくり手」と情報交換をする欲求が高い、ということがわかっている。

また2010(平成22)年の質問紙調査の結果からは、主催者と訪問者の双方が趣味を通じたネットワークづくりとしてオープンガーデンに参加していることが明らかになっている。すなわち、必ずしも庭園の質や分布のみが訪問を決定づける訳ではなく、訪問者と主催者の嗜好が一致したときに訪問する庭園が選択されているのである³²⁾。さらに先行研究では、統計的に有意である親和性の高い庭園のつながりの存在が指摘されている³³⁾。これらのことから、ガーデニングという行為・活動は、趣味に関わる情報を媒介としてコミュニティの形成とも大きく関わっていることを示唆するものと思われる。

本研究ではさらに、オープンガーデンの担い手である庭のオーナーの特性について、同じく余暇退屈度からの分析を試みた³⁴⁾。これは、先の市民一般のサンプルと趣味縁の担い手の状況とを比較するためである。

基本統計量で見ると、流山市の一般サンプルと比べると、全項目で平均点が低く(余暇退屈度が低い=満足度が高いことを意味する)、とりわけ「自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいのかわからない」(LBS_10)という項目では、最大値が2(=あまりそうは思わない)であるとともに、平均点が1.26、また標準偏差が0.449とバラつきが少なくなっている(表5)。これは趣味としてやりたいことがハッキリしていることを意味している。また、「私にとって、自由時間は面倒で厄介なものである」(LBS_1)という項目の平均点が最も低くなっているのも、そこに起因すると思われる。それからスケール全体の信頼性係数はクロンバックのアルファで0.88であり、共通性の点からも、独立した尺度としてある程度の一貫性を保持しているものと考えられる。ただし上記と同じ理由で、2つの項目(LBS_1とLBS_10)のポイントが低くなっている(表6)。

それから因子分析によれば、抽出された2つの

表5 余暇退屈度の基本統計量（流山オープンガーデン実施オーナー）

	LBS_1 面倒	LBS_3 退屈	LBS_5 無駄	LBS_6 それなり	LBS_10 ぼんやり	LBS_11 寝る	LBS_14 不愉快	LBS_15 技術不足
平均値	1.22	1.35	1.39	1.43	1.26	1.43	1.48	1.52
最頻値	1	1	1	1	1	1	1	1
標準偏差	.518	.573	.656	.728	.449	.896	.947	.730
最小値	1	1	1	1	1	1	1	1
最大値	3	3	3	3	2	5	5	3

N = 23

表6 余暇退屈度項目に見られる共通性（流山オープンガーデン実施オーナー）

		初期の 因子負荷量の 2乗和	因子抽出後の 因子負荷量の 2乗和
LBS_1	面倒	.662	.759
LBS_3	退屈	.924	.966
LBS_5	無駄	.955	.999
LBS_6	それなり	.956	.970
LBS_10	ぼんやり	.614	.690
LBS_11	寝る	.891	.954
LBS_14	不愉快	.875	.924
LBS_15	技術不足	.728	.830

因子抽出法：一般化された最小2乗法

因子で55.21%の説明力があるが、第1因子は、「自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう」（LBS_11）・「余暇活動をそれほど楽しいとは思わない」（LBS_14）・「自由時間があると、退屈してしまう」（LBS_3）という3つの項目によるグループで、「自由時間における満足度の低さ」と名付けることができる。また第2因子は、「自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする」（LBS_5）・「自由時間の際、いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといって、ほかにどうしたらいいかわからない」（LBS_6）という2つの項目に代表されるグループで、「自由時間における自己肯定度の低さ」と名付けることができる（表7）。

さらに回転後の行列をプロットすると、流山市

の一般サンプルとの違いがわかる（図10）。

すなわち、流山市の一般サンプルでは第1因子を構成していた項目（LBS_5）が、同じく第2因子を構成していた項目（LBS_6、LBS_10）と同じグループを構成している。また逆に、一般サンプルでは第2因子を構成していた項目（LBS_15）が、同じく第1因子を構成していた項目（LBS_3、LBS_14）と同じグループを構成している。加えてこのグループには、流山市の一般サンプルでは独立していると考えられた項目（LBS_11）も位置づけられる。

このことは、一般サンプルとの違いを如実に表している。この違いは、基礎統計量の状況から見ると、ガーデニングという趣味を持つ母集団においては、逆転項目としてとらえらるとわかりやすい。

表7 流山オープンガーデン実施オーナーに見られる余暇退屈度の因子特性

寄与の程度	第1因子		第2因子	
	自由時間における満足度の低さ		自由時間における徒労感	
		因子負荷量		因子負荷量
項目	LBS_11【寝る】	1.02	LBS_5【無駄】	1.03
	LBS_14【不愉快】	0.92	LBS_6【それなり】	0.98
	LBS_3【退屈】	0.89	LBS_10【ぼんやり】	0.52
	LBS_15【技術不足】	0.73	LBS_1【面倒】	0.40
固有値 (%)	57.76		21.76	
累積寄与率 (%)	46.92		55.21	

因子抽出法：一般化された最小2乗法

回転法：プロマックス法

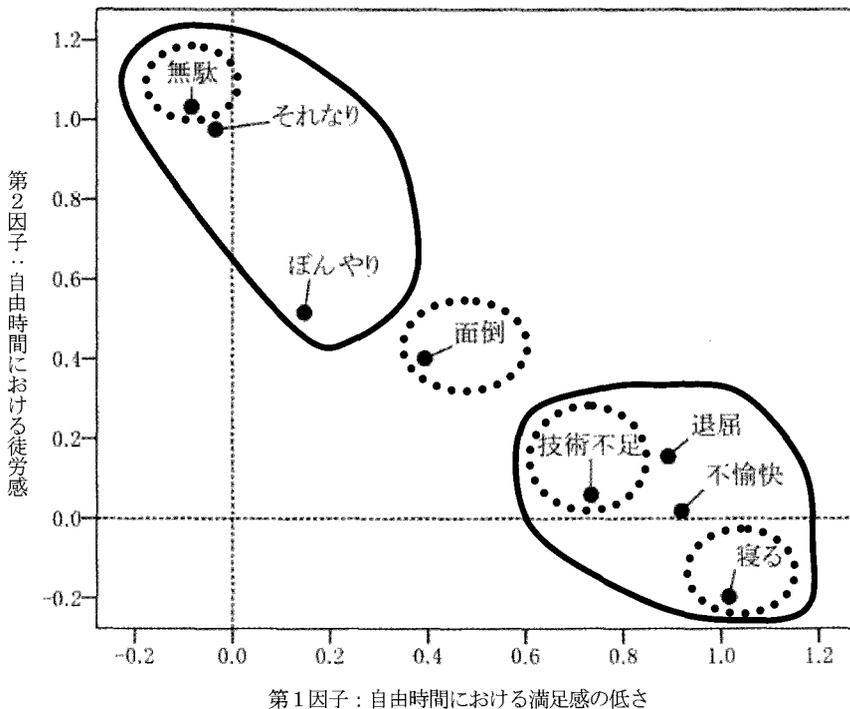


図8 余暇退屈度の成分プロット (流山市全体)

すなわち、やりたいことがはっきりしているから（「どうしたらいいかわからない」の逆）、無駄に感じられることは少ないし（「何をしても無駄なような気がする」の逆）、技術が身についているからこそ（「技術の欠如」の逆）、「退屈」しないし「何もせずに寝て過ごしてしまう」ようなこと

はあり得ないのである。

ここからすると、一般市民が趣味縁を構築するまでの間には、動機づけの段階を経て、その人の活動レベルによってそれぞれ異なる情報が求められていることがわかる。「どうしたらいいかわからない」アノミー（無気力）状態のグループには

動機づけに関わる情報が、そうでないグループには、その人が趣味を楽しむために必要な技術情報が求められているのである。

4. おわりに：指標からロードマップづくりへ

本研究では、豊かさを実現する指標をつくる上で求められる項目について洗い出すことを目的として、ガーデニングという個人のレジャー活動を、来訪者という要素から社会につながオープンガーデンに注目し、千葉県流山市をフィールドに選んで検討してきた。またその際、趣味縁という観点から考察を進める上で、先行研究における余暇診断調査の結果に注目し、余暇退屈度による対象の分析を試みた。

その結果、余暇退屈度ショートバージョン 16 項目をトリミングした短縮版 8 項目で、一般市民と趣味縁参加者との間に、意味のある違いのあることがわかった。すなわち、一般市民のサンプルでは、動機づけと余暇活動を楽しむための技術情報不足という 2 つの位相が未分化状態にあるのに対して、趣味縁においては、両者がはっきりと分かれている。このことは、趣味のレジャー活動を通して、自分に必要な技術情報を意識するようになった結果だと考えられる。

したがって、この余暇退屈度短縮版 8 項目を用いると、レジャー活動にかかわる情報提供に関して、初期の動機づけに関わる情報から中級以上に必要な詳細な技術情報まで、参加者の段階に応じて、そのレジャー活動との関わりが深まっていくようなロードマップを作成することのできる事がわかった。

ただし流山市の事例からは、オープンガーデンが実施されるにいたった経緯から、趣味縁としての活動と地域貢献という地縁に根ざした活動とがオーバーラップしており、両者のバランスにも意味のあることがわかってきた。オープンガーデンに着目するならば、今後さらなる事例研究を進めることが望まれる。

謝辞

本研究を行うにあたり、インタビューに協力してくださった K さん、H さん、初代会長 K さん

をはじめ、質問紙調査にご協力いただいた「ながれやまガーデニングクラブ『花恋人(カレント)』」のみなさま、流山市民のみなさまに、心より感謝いたします。

付記

なお本研究は、2008（平成 20）年度江戸川大学 学内研究「学際的アプローチによる地域研究—流山コミュニティモデルの構築と大学の役割—」（研究代表者：林香織、研究分担者：土屋薫、木村文香）、および、2013（平成 25）年度科学研究費基盤研究（C）課題番号 25501015、「オープンガーデンマップの設計による観光情報の類別」（研究代表者：土屋薫、研究分担者：林香織、下嶋聖）の一環として行われた調査の成果を利用したものである。

註

- 1) 2012（平成 24）年の調査では、「物の豊かさ」と答えた割合 30.3%の倍を超える 61.8%が「心の豊かさ」と答えるに至っている。
- 2) 土屋薫、2012、「ポスト消費社会における幸福のありか」『[気づき]の現代社会学』、梓出版社、65-90
- 3) 国民総生産（GNP）は、一定期間内に国民によって生産された財やサービスの付加価値の合計額を意味し、国内総生産（GDP）は、国内で生産された財やサービスの付加価値の合計額を意味するが、1993（平成 5）年以來、GDP が主要指標とされている。
- 4) 1999（平成 11）年からは発表が中止された。また 2011（平成 23）年には法政大学の坂本光司教授が、40 の社会経済指標を評価・分析・総合化して、47 都道府県の幸福度のランキングを発表したが、これは都道府県の政策上の課題を示すものであり、そうした環境整備の結果が個人にどのように反映されるかについては示されていない。
- 5) イデオロギーの押しつけになり全体主義と結びついてしまう。
- 6) 4 つの柱をもとに 9 つの要素から数値化を図っている。<http://bhutan-consulate.org/bhutan/nationalhappiness.html>

- 7) サンプリングの観点からは、国民全体の推計をどう行うか、という意味で議論の余地はあるが、実際には7,142人（およそ国民100人に1人）対して行われた。<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/800/154628.html>、<http://courrier.jp/blog/?p=12123>
- 8) 外務省の資料によれば、約73.3万人となっている（<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html>）。
- 9) イギリスのオープンガーデンは、1927（昭和2）年に設立されたナショナル・ガーデン・スキーム（National Gardens Scheme：以下NGS）という慈善団体が、入場料や茶菓などの収益金を、看護・医療や庭園保護などの団体に寄付する活動から始まった。公開される庭に関する情報をまとめた本が、「Gardens of England and Wales Open For Charity」（通称イエローブック）で、これに掲載されるにはNGSによる厳しい審査がある。
- 10) 高橋ちぐさ・下村孝 2002
- 11) 長谷川教左 2006
- 12) 川根あづさ・愛甲哲也・浅川昭一郎 2000
- 13) 相田明・進士五十八 2001
- 14) 野中勝利 2002
- 15) 平田富士男・橋俊光・望月昭 2003
- 16) 三分一淳・湯沢明・熊野稔 2007
- 17) 朴恵恩・野中勝利 2009
- 18) 野中勝利 2006
- 19) 岩瀬英恵・上甫木昭春 2007
- 20) 具体的には、世界的な大作の公開やシネマコンプレックスの増加、3D映画の公開開始、アート系映画や往年の名作の上映、1000本近い邦画の公開といった契機があった。
- 21) 具体的には、ミニロト・ロト6・スポーツ振興宝くじ toto・インスタント宝くじ・toto BIG・BIG1000 といった新しい商品が年を追って導入されてきた。
- 22) 1997（平成9）年の記述では「園芸用品の売上げが平成元年以降一貫して伸びており、『ガーデニング』がひとつのブームになっている。大型園芸専門店の出店は相次ぎ、既存店でも園芸用品の品揃えを強化している」となっている。1998（平成10）年の記述では
- 「ガーデニング・ブームで、園芸用品市場が急拡大している。ホームセンターやデパートで用品・用具がよく売れているようだ。国内や海外のガーデニングを視察するパッケージツアーも人気を集めている。ガーデニングができるマンションや住宅まで登場している」となっている。
- 23) 澁谷泰秀・土屋薫 2001
- 24) 林香織・土屋薫・木村文香 2009
- 25) 流山市全体に関しては、筆者の参加した調査研究であるため、あらためてデータを集計して掲載した。この調査は、2008（平成20）年度江戸川大学学内共同研究として、流山市に居住する満20歳以上の男女を対象母集団とし、流山市選挙人名簿に基づく人口比例確率抽出法の原理による層化二段階無作為抽出で2008（平成20）年4月に実施されたものである。
- 26) ここでは、層化二段階無作為抽出法によるサンプリングで有効回答数が242というサンプル数のため、因子抽出法として最尤法を用いた。また、2つの因子が完全に独立したものであるという前提に立たないため、斜交解（プロマックス回転）による分析を行った。なお、分析にはPASW Statistics 18.0を用いた。
- 27) 部門は以下の3つから構成されている（①ガーデン部門＝個人対象で3m²以上の庭が対象、②ポケットガーデン＝個人対象で3m²以下の庭が対象、③緑の街並み部門＝道路から見た個人の庭や生け垣と自治会・学校等の緑化が対象）。
- 28) 2013（平成25）年から、事務局はガーデニングクラブ内に置かれている。
- 29) 『趣味の園芸 別冊』（2009）、『ガーデンガーデン 秋』（2009）、『趣味の園芸』3月号・6月号（2010）に記事が掲載されている。
- 30) 2014（平成26）年2月18日にながれやまガーデニングクラブ現会長のKさんに行ったインタビューによれば、1月には新年会、4月にはオープンガーデン打ち合わせとマップ配布、7月にはオープンガーデンの反省会が行われるという。
- 31) 土屋薫・新井正彦（2010）『緑化と地域コミュ

ニティ構築の担い手に関する研究—先進地事例調査による比較研究—, 土屋薫, 江戸川大学内学内共同研究成果報告書

32) 土屋薫 2010, 2011

33) 林香織 2012

34) この調査は、2013 (平成 25) 年度科学研究費基盤研究 (C) 課題番号 25501015、「オープンガーデンマップの設計による観光情報の類別」、研究代表者: 土屋薫、研究分担者: 林香織、下嶋聖) の一環で行われた。調査対象は、2014 年に流山市でオープンガーデンを統一公開日 (5 月 18 日～20 日) に実施した 27 庭 (集合住宅は除く) で、調査実施期間は 2014 年 9 月、留置調査法で回収のみ郵送で行った。有効回答数は 23 であった。また分析には PASW Statistics 18.0 を用いた。

引用参考文献

相田明・進士五十八, 先駆的事例を通じた我が国におけるオープンガーデンの意義, 東京農大農学集報 46 (3), 2001

茅野宏明・中澤由夫・平岡貴子, 余暇生活診断のためのツール開発に関する研究, 自由時間研究 17, 1995

長谷川教左, 日本におけるガーデニング・ブームその時期と参加者, 麗澤大学紀要 83, 2006

林香織, オープンガーデン訪問者のメディア利用と訪問ルートの相関—流山市江戸川台地区を事例に一, 江戸川大学研究紀要 23, 2012

林香織・土屋薫・木村文香, 学際的アプローチによる地域研究—流山コミュニティモデルの構築と大学の役割—, 江戸川大学学内共同研究報告書, 2009

平田富士男・橘俊光・望月昭, わが国におけるオープンガーデンの地域経済への波及効果量の把握に関する研究, ランドスケープ研究 66 (5), 2003

Iso-Ahola, Seppo E. and Weissinger, Ellen, Perceptions of Boredom in Leisure: Conceptualization, Reliability and Validity of the Leisure Boredom Scale, Journal of Leisure Research 22 (1), 1990

岩瀬英恵・上甫木昭春, 兵庫県三田市におけるオープンガーデンの活動と会員の意識・行動の変

化に関する研究, ランドスケープ研究 70 (5), 2007

自由時間デザイン協会, レジャー白書 2001～2002

川根あづさ・愛甲哲也・浅川昭一郎, 北海道恵庭市恵み野地区を事例とした住民の庭づくりに対する意識と取り組みについて, ランドスケープ研究 63 (5), 2000

日本生産性本部, レジャー白書 2009～2013

野中勝利, 長野県小布施町におけるオープンガーデンの特徴と課題, ランドスケープ研究 65 (5), 2002

野中勝利, 緑のイベント時におけるオープンガーデンの位置づけ, ランドスケープ研究 69 (5), 2006

朴恵恩・野中勝利, オープンガーデンにおける活動組織と支援組織との関係及びその影響に関する研究, 日本都市計画学会都市計画論文集 44 (3), 2009

三分一淳・湯沢昭・熊野稔, オープンガーデン実施者の開放性に関する意識構造の検討, ランドスケープ研究 70 (5), 2007

澁谷泰秀・土屋薫, 青森市における余暇退屈度の特徴, 青森大学研究紀要 24 (2)

澁谷泰秀・土屋薫, 余暇行動モデルの行動計量学的分析, 平成 12 年度私学振興財団「特色ある教育研究の推進」事業報告書, 2001

社会経済生産性本部, レジャー白書 2003～2008

高橋ちぐさ・下村孝, 雑誌・書籍の出版動向及び記事内容から見たガーデニングブームの実態, ランドスケープ研究 65 (5), 2002

田口節芳・富永徳幸・折本浩一・谷岡憲三, 大学生のレジャーにおける退屈感, レジャー・レクリエーション研究 40, 1999

土屋薫・新井正彦, 緑化と地域コミュニティ構築の担い手に関する研究—先進地事例調査による比較研究—, 土屋薫, 江戸川大学内学内共同研究成果報告書, 2010

土屋薫, 着地型観光におけるニーズのマッチングに関する基礎的研究—千葉県流山市におけるオープンガーデンを事例として—, レジャー・レクリエーション研究 65, 2010

土屋薫, レジャー論から見た「オープンガーデン」

に関する一考察 —千葉県流山市を事例として—, 情報と社会 21, 2011
土屋薫, 着地型観光支援ツールとしてのデジタルマップの可能性 —観光情報とルート選択に関する考察—, 江戸川大学研究紀要 23, 2013
渡邊誠, 流山市におけるオープンガーデンに関する考察 —深谷市の事例との比較から—, 日本国際観光学会論文集 16, 2009

Weissinger, E., Caldwell, L., and Bandalos, D. L.,
Relation Between Intrinsic Motivation and Boredom
in Leisure Time, Leisure Sciences 14, 1992
余暇開発センター, レジャー白書'94～2000

(受付：2015年1月9日)
(受理：2015年2月6日)